



不安抱え住民避難

福島第一原発周辺 4万人以上



全町民に避難指示が出たため、避難所から町外へ向かう住民たち。12日午前6時7分、福島県大熊町、水野義則撮影

原子炉の圧力を下げるため、放射能を含む蒸気を外部に放出する作業を始めた東京電力福島第一・第二原発。半径10キロ以内の住民に国から避難指示が出たため、地元の福島県大熊町など4町の住民4万人以上が内陸などへ避難を始めた。「とにかく西へ」。いったん身を寄せた避難所から、行き先も示されないまま不安の中で移動を始めた。

「避難指示が出されました」。原発から約3.5キロに位置する避難所の町総合スポーツセンターには午前6時、町の防災無線で避難指示が伝えられた。約2千人の住民が毛布や水の入ったペットボトル、食糧を抱え、バスに乗り込んだ。センターで毛布にくるまっていた女性は「糖尿病なのに、インスリンを家に置いてきてしまった」と涙を流した。

避難誘導は、白い防護服に身を包んだ十数人の警察官が担当。避難所は物々しい雰囲気にも包まれた。「とにかく西へ向かって下さい」。避難所の責任者を務める同町の課長がスピーカーで叫ぶ。住民から「ここに待機できない状況なのか」「すでに放射能が漏れているということか」と詰め寄られたが、課長らは「私らも正確な情報がないんです」と言うばかりだった。

行き先は示されないまま、高齢者や子ども連れなどを乗せたバスは内陸の田村市や郡山市方面へ向かった。バスは途中の避難所でも数百人の住民を乗せ、ひたすら西へ向かった。午前8時半ごろには田村市の市立古道小学校に数台のバスが次々と到着。避難してきた人は疲れた表情で車を降りた。